越境精神

小長谷　有紀

梅棹忠夫の残したもの　7

楽しさ追求に幸福あり

暗黒の中の光明

まだあけやらぬ梅雨の、小休止の好天。お日さまはうれしいが、蒸し暑さには弱る。それでもわたしはクーラーをつけない。なるだけ電気製品に頼るまいと決心したから。多くの人びとがいつもとはちょっと違った気持ちで、この夏をしのいでみせるだろう。

一般市民が家庭で節電を心がけるのは、企業からの要請があったからではない。福島原発の事故によって、制御しきれないほど危険な技術に、かくも安易に依存してきたことに気づいたからである。

関西電力のホームページによれば、数機の原発の停止によって317万キロワットの供給が減少しているが、なお455万キロワットを自社の原発に頼っている。そもそも、このような原子力への依存が始まったのは大阪万博エキスポ'70からだった。

日本万国博覧会の公式記録によれば、日本原電の敦賀原発は「45年3月14日の万国博開会式から会場へ送電を始め」、関電の美浜原発も「同年8月8日から試送電を開始、『人類の進歩と調和』をテーマにした万国博会場が〝原子の灯〟で輝いた」とある。

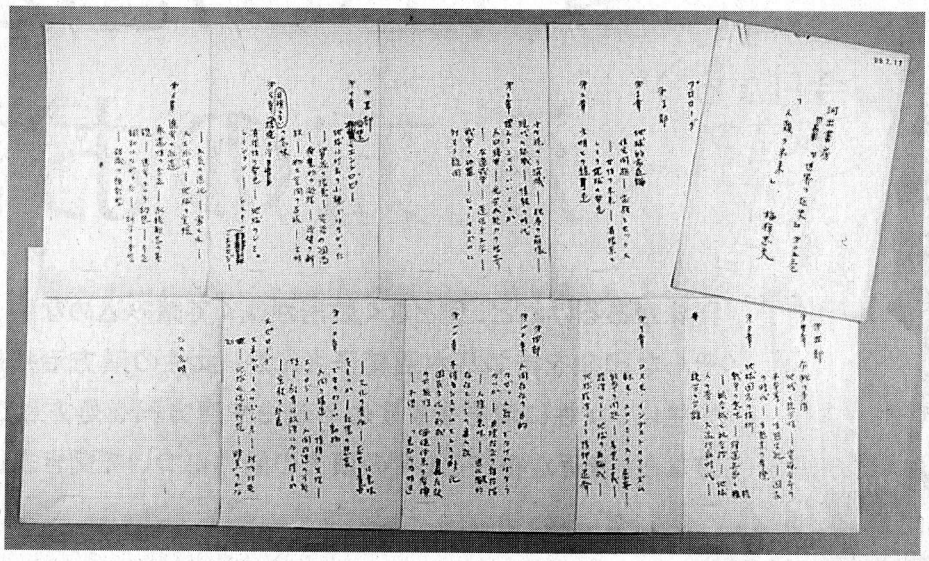
科学技術の進歩が人類の未来を約束すると信じられた時代だった。しかし一方で、すでに人類の危機が語られ始めてもいた。たとえば、ローマクラブと呼ばれる国際的なグループが、人口爆発や環境破壊などについて議論していた。

梅棹忠夫の場合は、ちょうど万博のころ、河出書房の「世界の歴史」全25巻の最終巻として『人類の未来』を書くために、小松左京（SF作家）、米山俊直（文化人類学）、吉良竜夫（植物生態学）、樋口敬二（雪氷物理学）、藤岡喜愛（心理学）らと対談していた。梅棹アーカイブズには、そうしたブレインストーミングの録音テープや目次案などが残っている。

ローマクラブと違って、梅棹らは、人類の課題を科学者が技術的に解決できるとは期待しなかった。むしろ、そうした考え方が人間の業であるがゆえに、人類は苦難に陥る、と考えた。

未完に終わった『人類の未来』の目次案をみると、エピローグは「エネルギーのつぶし方」という見出しで始まり、「暗黒の中の光明」で終わっている。

前者は、知的生命体である人間は、あくなき好奇心を発揮してしまうので、その知的エネルギーをいかに消費しておいたらよいか、という意味である。のちに梅棹は、桑原武夫との対談で「（みんなが）科学を趣味にしたらええ」とも述べている。独占的な専門家による目的追求型ひいては利潤追求型の好奇心の発露よりも、アマチュアリズムで楽しさを追求することに幸福の可能性を見いだし、「暗黒の中の光明」を期待したのだった。



幻の書『人類の未来』の目次案。梅棹忠夫による自筆原稿

（国立民族学博物館教授）